

座談会

「広がる読書の可能性」

鹿児島大学 准教授

上谷 順三郎
かみたに じゆんざぶろう

台東区立御徒町台東中学校 教諭

甲斐 利恵子
かゐい りえこ

静岡市立森下小学校 司書教諭

塩谷 京子
しおや きょうこ

読書の質をどう高めていくか

甲斐 今、子どもたちの「活字離れ」が問題視されていますが、自分の教室の実感からすると、子どもたちは本をけっこう読んでいるという印象があるのです。

上谷 読書量に関しては、たしかにその通りだと思っています。毎日新聞社の「学校読書調

査」(※1)を長いスパンで見ると、中学生の1か月の平均読書冊数は増えてきていると言えます。

塩谷 わたしは、この調査結果を新聞で見たときに、小学生の平均読書冊数にたいへん驚きました。前回(二〇〇五年)調査のときよりも2.0冊増えて、9.7冊と、急激に伸びているのです。毎日新聞では、増えた理由の一つとして、「朝の読書」を挙げていましたが、わたしが勤務している静岡市でも、朝読書の実施率は非常に高いのです。甲斐先生が「読んでいる」と感じられるのは、小学校でのこのような流れがあるからだと思います。

上谷 朝読書の裾野が広がって、読むことに対して抵抗感が少なくなっているのかもしれないですね。「読書へのアニメーション」(※2)を取り入れる学校も増えてきましたから、子どもたちの読書への意識が変わってきていると言えます。

量はたしかに増えてきているのですが、国語の力に関わらせていこうとすると、それだけではダメなんですね。大事な点は、子どもたちの実態を踏まえて、質の指導をどうするかだと思います。ジャンルを広げていけるような質の深まりを考えていく必要があると

思います。

また、中学生では読書冊数のわりに、読書の時間が少ないという現状もあります。読んでいる本の質や種類、時間にも目を向けると、これからの指導のあり方が見えてくると思います。

人を介することが読書意欲につながる

甲斐 わたしが教員に成り立てのころは、児童文学か大人の文学かというようにヤングアダルトの本が非常に少なかったですね。最近、あさのあつこさんに代表されるようなヤングアダルトの分野が充実してきているように思います。

塩谷 今の自分と等身大の人物を描いてくれる作家がたくさんいますね。例えば、森絵都さんの『カラフル』は、子どもたちが今のままの自分で、そのまま入っていけるようです。翻訳ものでは、金原瑞人さんなどは、子どもたちがわくわくするような作品を提供してくださっていますね。

甲斐 ヤングアダルトが充実している一方で、子どもたちは、わたしの感覚をどんどん突き崩していった、大人の分野に平気入り

込んでくることがあります。『博士の愛した数式』はすごくおもしろい。」と生徒に言われたときには、「この作品のおもしろさを中学生が語ってしまうの！」と驚いてしまいました。でもこの生徒が特別なのではなく、メディアで人気のタレントが「感動した。」などと言うと、すぐに影響されて手を伸ばすことがあるんですね。

上谷 中学生では、読む本を決めるとき、「友達の紹介」というものが動機となることが多く見られます。逆に残念なのは、先生方があまり本を薦めていないことです。もっとも、先生に薦められたら読みたくないという反感をもつこともあるのでしようが(笑)。しかし怯まずに、先生方は薦め続けてください。

甲斐 やはり、教師自身が、「読書は楽しい。こんなにもおもしろい。」と思うことが大切ですね。よい作品に出会ったとき、人は気持ちが開かれて、この喜びを分かち合いたいと思う。人とつながっていいこうとする。読書そのものに、コミュニケーションを生み出す力があると思います。

塩谷 小学校においても友達の影響は大き

いですね。例えば、『かいけつゾロリ』シリーズ(原ゆたか作)を読んでいる子どもたちが、突然、あさのあつこさんや森絵都さんの作品を読むことはありません。本をパッと開いたときに字が小さいと抵抗を感じるわけです。五年生の終わりの話ですが、ある子が『カラフル』を紹介したのです。「これは表紙が殺風景で、『カラフル』という題名を読んだだけでは、何の意味かわからないけれども、とにかく騙されたと思って読んでほしい。」と。そうしたらクラスの半分以上の子が読んでしまったのです。そういう状況を作ってしまったら友達というのは非常に大きいですね。

甲斐 友達がどんな本を読んでいるのかを知ると、その友達の意外な一面が見えて、「あいつがあの本を読んでいるのか、僕も読んでみよう。」とかなるようですね。

塩谷 友達の影響の大きさに驚いた例がもう一つあるのです。あるとき六年生の子が、「東野圭吾さんの『手紙』を読んだとき、僕は初めて本を読んで泣いた。」と言うのです。すごくいたづらな、そういうことには縁のなさそうな子が、本を読んでこんなに心が動かされたということを語るのです。そのことが

甲斐 わたしは教員仲間から教えてもらった「朗読劇場」という方法で「読み聞かせ」をやっています。教室の電気を消したり、カーテンを閉めて暗くしたり、わざわざドアから入り直したり。さながらわたしは女優気分です。生徒が、「先生、最後に感想を聞くの。」と聞いてくるので、「舞台の上から観客に向かって、『感想を言いなさい』なんて言うわけないでしょう。」と答えたら、「だったらどんどんやって。」と。つい最近も、中三の生徒たちに、『あらしのよるに』(きむらゆういち文)を読みました。以前、小学校の教科書に掲載されていた作品ですが、読むと大喜びです。年齢に関係なく、聞き浸る時間は好きなのだろうなと感じました。

塩谷 小学校一年生の子どもたちは、四、五月あたりはすごく緊張していますが、幼稚園や保育園で馴染んでいた本を読んでもあげると、

上谷 順三郎(かみたにじゅんさぶろう) 鹿児島県生まれ。鹿児島大学准教授。光村図書小学校・中学校国語教科書編集委員。著書に、「読者論で国語の授業を見直す」「明治図書、「読者論」に立つ読みの指導」「国語教育研究の現代的視点」(ともに共著、東洋館出版社)などがある。



きっかけで、クラスの中で東野圭吾さんがはやりました。

上谷 中学生ごろから一気に、「感動する本」を好むようになりますね。中学生は日常の中で、心のひだとか、幅とか、深さといったものを考えるようになるのだと思います。六年生の夏休みあたりを境に、そういう自己意識を構築するような本を求め始めるのです。

甲斐 わたしもそのひだをすごくリアルに

表情がガラリと変わって、みんなにここへ喜んでいきます。中学生も同じだろうと思います。

上谷 読書というのは、以前読んだものを読み返してみると、昔の自分と今の自分との



甲斐 利恵子(かいらいえこ) 福岡県生まれ。東京都台東区立御徒町台東中学校教諭。光村図書中学校国語教科書編集委員。著書に、「子どもの情景」(共著・光村教育図書)、「聞き手話し手を育てる」(共著・東洋館出版社)、「中学教師もつらい」(共著・大月書店)などがある。

よい作品に出会ったとき、人は気持ちが開かれて、この喜びを分かち合いたいと思う。

「読書」そのものに、コミュニケーションを生み出す力があるのです。



教科のカリキュラムに合わせた「別置コーナー」（塩谷先生作成）

違いを確かめられる。しかも再読というのは、自分のお気に入りの本が見つかったという意味でも重要だと思います。

先ほどの本の紹介にしても、「この人はこの本をこんなふうに取り上げているけれども、自分が読んだら違う発見があるかもしれない。」と、読みの多様性に気づきつけかけになる。そういった読みが、読書の質を高めていきます。

「再読」や「多様な読み」など、学校でもできそうなことはどんどん取り入れて、読書のいろいろな面を見せてあげることが、これからの指導のあり方かと思っています。

教科書教材からの読書への広がり

塩谷 先日、五年生の読書教材『千年の釘にいどむ』（光村図書「国語」五上）という鍛冶職人 白鷹幸伯さんの釘作りの話を扱った際、地域でそのような仕事をしている方に学校に来ていただいたのです。体験を直接語ってくださる方がいると、「白鷹さんのような人がいるんだ。」という実感が湧き、ほかの人の生き方、伝記などにも興味が出てきますね。

甲斐 教科書教材から読書へとつなげる観

先生方の工夫次第で、教科を限定しない幅広い読書力を身につけられる環境が作れます。

と思って、日常の中で図書館にちよつと寄ってみようと思うようになります。新聞などを切り抜いて、ラミネーターにかけて置いておくのも有効な方法です。

先生方の工夫次第で、教科を限定しない幅広い読書力を身につけられる環境が作れると思います。

上谷 国語科以外の先生と、ジャンルや内容との関連を考えて連携しながら教科をつな

点はいろいろありますね。『故郷』（光村図書「国語」3）だったら、同じ作者の『藤野先生』とか『小さな出来事』とか、そういうわかりやすいつながり方もありますし、『言葉を探検する』（光村図書「国語」1）では『擬音語・擬態語』使い分け帳』（山口仲美・佐藤有紀著）につなげていたりできます。古典だったら、田辺聖子さんの古典に関する作品とか、漫画の『あさきゆめみし』（大和和紀著）とか、橋本治さんの『桃尻語訳枕草子』とか。古典は、現代語訳の比べ読みも楽しいと思います。

上谷 必ずしも正統的なものでなくても、『盆土産』（光村図書「国語」2）を柔軟にとらえて、エビフライの食べ方などにつなげてもおもしろい。読書というのは、先生方の意識次第でかなりいろいろな切り口が見つかるかと思っています。

子どもに読ませたい本は「別置コーナー」に置いてみる

塩谷 そういう切り口をたくさん考えて、学校図書館の中に「別置コーナー」を作るといいと思います。教科のカリキュラムに合わせたものでもいいですし、季節に合わせてもいい

いではないかと、本当の読書力はつきませんね。その意味でも、図書館はもつと「別置コーナー」だらけにしてもいいんじゃないですか。中学校も図書館を作り変えるくらいにしていくと、生徒たちが出会う本が変わってくるでしょうね。

塩谷 別置だらけだと、必要な本が探せなくなりますね（笑）。

別置には、ほかにも効果があります。子どもがなかなか手に取らない本を、人気のある「別置コーナー」の中に忍ばせておくのです。いっしょに並んでいると、いつの間にか目に入ってしまうでしょう。

甲斐 サプリミナル効果？（笑）

塩谷 そんな感じですね。こういう本も読んでほしいという、こちら側の願いを、「別置コーナー」に込めることができるのです。

いですね。それが終わったらまた元の棚に戻すのですが、「別置コーナー」は子どもたちに非常に人気です。

甲斐 中学校だと、いろいろな教科の先生に、これから学習する単元に関係する本を抜き出してもらって、「別置コーナー」を作るのもいいですね。

塩谷 タイムリーなものが、ほしいときすぐ手に取れる工夫が大事ですね。そうすると子どもたちは、いつも何かあるのではない



塩谷 京子（しおやきょうこ）
静岡県生まれ。静岡市立森下小学校図書教諭。
子どもに情報活用する力を身につけるための授業の開発を進める。著書に「しるべる力をそだてる授業！」（共著・ポプラ社）、『学校図書館で育む情報リテラシー—すぐ実践できる小学校の情報活用スキル—』編・共著・全国学校図書館協議会 などがある。

「読書力」と「国語力」は密着している

塩谷 「読書力」と「調べる力」を分けて考えることが多いのですが、調べることは、基本的に読書力がないとできませんし、調べたことがまた読書力にも返っていくと思います。この両者のバランスが大切ですね。

最近、インターネットを使うことも多くなりましたが、インターネットであっても、結局、そこに書いてあるのは言葉です。その言葉をどう理解して、人にどんな言葉で伝えるのか。その力は、小さいころに出会った絵本から感じとった経験などが大きく影響しているように思います。それが最終的には、国語力というところに戻ってくるという気がします。

甲斐 読書のベースがあつてこそ、知的好奇心も湧いてくるものですね。

上谷 文化審議会の答申「これからの時代に求められる国語力について」にもあるように、読書は、国語力を構成している「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」「国語の知識等」のいずれにも関わっていて、読書と国語力はかなり密着しているものと考えることができると思います。

「自ら本に手を伸ばす子ども」を育てるため

これからの時代に求められる国語力は、 読書抜きでは考えられない。

には、ある程度意図的に指導していく必要があるのです。これからの時代に求められる国語力は、読書抜きでは考えられないわけです。わたしは、「PISA」の調査結果が悪かったのも幸いだと思います。このようなことを考えるきっかけとなっているわけですから。

甲斐 現場では時間数が足りなくて、「読書といってもなかなか…」と思うかもしれませんが、指導者が関われる部分を確かめて、まずはできることから取り組んでいきたいですね。

上谷 先生方は、嫌われようが生徒の反応が悪かろうが、生徒にどんな本を薦めてほしいです。中学生にとっての読書とは、自己意識を構築することなのです。やはり教師は、そこに強く関わっていける存在でありたい。

塩谷 教室の先生の机の上に、いつも本が

何冊か積んであるといいですね。先生の好きな本や子どもが持ってきた本、または、子どもには関係のない本だとしても、いつも本が置いてあるという環境を作ってあげること、子どもの意識も変わるかもしれません。

甲斐 机に積んである本から、コミュニケーションが生まれるかもしれない。教師自身が本好きであれば、子どもには必ず伝わる気がします。読む喜びを、子どもと分かち合っていきたいですね。

※1 「学校読書調査」

毎日新聞社が、社団法人全国学校図書館協議会の協力を得て、毎年実施している。小（四年生以上）・中・高校生を対象としており、子どもたちの読書傾向を調べることが目的とする。座談会収録時点では、二〇〇六年の調査結果が公表されていた。

※2 「読書へのアニマシオン」

スペインのM・M・サルト女史が提唱した読書教育メソッド。「どんな子どもでも潜在的に『読む力』を持っている」との考えに立ち、子どもの中から自然に「読む力」を引き出すことを目的としている。「estrategia」（作戦、戦略）と呼ばれる創造的な遊びが75通り開発されている。

